

C-10 毛布の被服生理学的研究(才3報) —— 変温時における皮膚温と心理
反応 —— 大阪市大家政 ○ 吉村 正明 弓削 治

目的： 被服生理学は、人間の生理を被服と関連させるときに生ずる諸問題を追求するものである。そこで人体・被服・環境を1つのクローズド・システムとしてとらえ、その中で被服生理学を中心として工学、心理学などの分野から総合的な理論体系を築く試みを行なった。本報告は以上の一連の研究のうち温度を変化させた場合の皮膚温と心理反応について報告する。

方法： 実験に用いた毛布はウール織(A)、アクリル織(B)、ウール・タフト(C)、アクリル・タフト(D)の4種である。就眠時実験(才1報)、恒温時実験(才2報)に引続き、今回は $28^{\circ}\text{C} \rightarrow 8^{\circ}\text{C}$ に温度を変化させた人工気候室内で、就床させ人体生理機能として各部位別皮膚温と毛布内温湿度、毛布表面温湿度を測定すると共に、自由連想法によって収集した形容詞をもとに抽出した29の形容詞を被検者に提示して5段階SD法に基づいて心理反応を測定した。

結果： 1, 環境温度の変化に伴って同一試料に対する評価も変化してきており、特に肌ごわり等材質に関する評価においてそれがみられた。

2, 身体末梢部、身体躯幹部平均皮膚温から求めた回帰式を比較した結果、毛布Aと毛布Bとの間に有意な差がみられた。

3, 毛布内湿度は、環境条件が変化するにつれて変化をしていく傾向を示すが、ほとんどが30%RH以下であった。